会いに向かう……（仮題名）

kuro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
会いに向かう……（仮題名）

【Ｎコード】
Ｎ７９９１Ｙ

【作者名】
ｋｕｒｏ

【あらすじ】
「死獣」と呼ばれる怪物が地上に現れてから数百年。
ある町にその危険な怪物「死獣」と戦う男、グレイがいた。
教会に所属し死獣と戦う聖兵であるグレイだが、ある時、近くの町から助っ人を頼まれ、そこへ向かう。

始まり

会いたい人がいます。

どうしても会いたい人です。

ですが、会いにいこうにもその人は遠い場所にいて会うことができません。

でも、会いに行く方法はあります。

それは大変難しい事ですが彼女に会うために頑張ります。

遠い場所にいる彼女は……それまで私を待ってくれるでしょうか？

それとも、待つことに飽きて別の場所に行ってしまったでしょうか？

それだと大変です。

彼女は大変な方向音痴なので、きっとすぐ迷子になってしまいます。

これは急いで向かい、しっかりと彼女の手をにぎって離さないようにしなければ。

彼女はそれを嫌がるでしょうか？

いえ、多分子供扱いされてると思って怒るでしょうね。

ですが、私は手を離すつもりはありません。

何があってもです。

勝手にずいぶん遠い所へ行って、私を困らせたその罰です。

昔から、いつも勝手にどこかに行って……。

……。

……。

あぁ、本当、彼女には困ったものです。

そして、こんな事愚痴ばかり考えている場合ではありませんね。

彼女が迷子になる前に早く彼女の元へ向かわなくては――

目覚め

……。

……。

……。

「……んー」

目覚めると、そこは私の部屋でした。

私は夢から現実に帰ってきたのです。

ですが、現実に帰っても残念ながら彼女には会えません。

でも、いつか会いにいきます。

頑張らなければ、と私は気合を入れて朝の身支度を整え始めます。

備え付けの洗面台の上で洗顔と歯が磨き――、あぁ無精ひげが生えていると彼女が嫌がるのでナイフで剃ります。

それが終わると次は服を着替えます。

上下に黒の戦闘服、そして最後にくたびれた灰色のフードコートを着て終了です。

これで身支度が終わったので、朝食を食べに外に出ます。

私は小さな家に一人で住んでいるので私が料理を作らなければ誰も作ってくれません。

そして私は料理が作れないので、必然的に外に料理を食べに行きます。

向かう先は大衆食堂です。

そこで焼きたてのパンと旬の野菜スープを食べます。大変おいしいので毎日通っています。

あぁ、でも行く前に部屋の隅にかけておいた長い長方形の「モノ」を腰のベルトに差してぶら下げます。

この世界ではとてもポピュラーな武器で、名前を「剣」と言います。

普通の剣とは少し中身が違いますが、私の大事な仕事道具です。

――では、これから朝食を食べに行きます。

――ある時から、この世界には『死獣』と呼ばれる、体から瘴気

を放つ黒い怪物が現れ始めました。

突然現れた『死獣』は瘴気を纏いながら人々を襲いました。

当時の人々は必死に抵抗しましたが、ただの鉄の剣や槍では『死獣』の体に傷を残す事は出来ません。

その為、いくつもの国が『死獣』を倒すべく研究を重ね、対抗できる武器を開発し始めました。

『死獣』に対抗できる武器を開発するにはとても時間はかかりましたが、幾つかの国がそれに成功します。

開発に成功した国々は、さっそく自国の騎士や兵達に武器を持たせ、自国の民を守りました。

しかし、開発が遅れた国やそもそも作る事ができなかった国は『死獣』に殺され続け、ついには滅びました。

ですが、『死獣』は滅ぶ事はありませんでした。

彼らは殺しても殺してどこからともなく現れ続けたのです。

国は何年も『死獣』に荒らされ続け、国と国とをつなぐ街道は生き物の死体で溢れました。

当然治安が悪化しましたが、それぞれの国の治安を守る騎士や兵達には『死獣』から人々を守る仕事があった為、民の街での安全は二の次になりました。

彼らが持つ武器でしか人を倒す事が出来ないことを知っていた人々は、無理に騎士や兵達に頼ることが出来ず、この辛い現状を受け止めるしかありませんでした。

――そんな生活を民が耐える日々が続いたある日。

突然、ある組織が『死獣』に対抗する新しい技術を編み出しました。

その組織は国が荒れる中、一番苦難を味わい、同時に一番富を手に入れた組織でした。

その組織の名は、「教会」といいます。

聖兵

私の仕事は「聖兵」といい、死獣と呼ばれる怪物から人々を守るお仕事です。

昔はこの仕事を騎士や兵隊のみなさんが行っていたそうですが、今は私達の仕事です。

私達聖兵は教会と呼ばれる組織に所属し、そこで情報を貰いながら死獣を退治しています。

聖兵は教会の本部から町や村に派遣され、一定期間その町で仕事をします。

一つの場所に多くて十数人、少なくて二、三人が派遣され、その町の周辺に出現する死獣を退治します。

ようするに、用心棒みたいなものです。

そして、町や村の周辺に死獣が現れなくなると私達聖兵は本部に報告書を出し、次の場所に移動します。

ちょうど今、私が所属しているこの町は私を含めた3人の聖兵で死獣を狩り続けたので、死獣の発見率がめっきり減り、

そろそろ転属願いを出す時期です。

私は今日にもその報告書でも書こうかと考えながら、情報を貰うために町の教会に入りました。

『ギィィッ』

「……おや？」

少し重い教会の扉を開けた私は、そこで少し間の抜けた声を出してしまいました。

教会の中の礼拝堂にはこの街の神父様と私以外の聖兵が二人すでにいたからです。

これは普段はみんながここまで揃うなんてことはないからです。

仕事で予定を立てた時は別ですが、今日は特に仕事の打ち合わせなどしていません。

「……今日は仕事の予定はなかったはずですが、一体皆さん集まってどうしました？」

私は不思議に思い、聖兵の一人に近寄って何故ここまで集まりがいいのか聞いてみました。

「それが、グレイさん……。困ったことが起きたんです」

「もしかして、死獣が出ましたか？」

私は仲間の聖兵にそう訊ねました。これが一番この状況に納得できます。

突然現れた死獣が出たのなら緊急の呼び出しがかかり、みんなが呼ばれたと納得ができます。

ですが、不思議な事に聖兵のみなさんの顔に緊迫感がありません。神父様も緊迫というよりも悩んでいるといいた様子です。

「いや、死獣は出てません。今回は別の話でみんな集まっているんです。だからそれは安心して大丈夫です」

「では、なんで皆さんこんなに集まっているんですか？」

「実はここからだいぶ離れた町から助っ人を頼まれたんです」

「助っ人？」

「はい。聖兵の助っ人です。教会からの紙も届いてます」

「人数の指定はありますか？」

私は質問をしながら何故彼らが困った顔をしているのかわかりました。他の街から聖兵を助っ人を頼むということは、それだけ厄介な死獣が現れたということをだからです。

そして、ここにいるのは私を含めた三人だけで私以外の二人はまだ聖兵になって二年ほどで経験が浅い。

きっと対処の仕方に困っていたのでしょう。

そんなことを考えていると、私の質問に神父様が答えてくれまし

た。

「人数の指定はありません。……でも、それなりの経験がある方を希望しているようでして」

「……。」

その答えを聞き、私は少し考えました。

こうして助っ人を頼む手紙が届いたということは、相手の町のほうはかなり困った状況にあるはずです。

それに対して、こちらの街の状況はかなり余裕があります。

3人の聖兵が町におりその町周辺の死獣は出現率はかなり低く、一人が助っ人にいっても二人だけでも町を守ることが出来ます。

（といっても、この二人は少し経験が浅い。どちらかを助っ人に向かわせるのは少し酷）

私はそこまで考え、神父様と二人の聖兵の顔を一度見ました。

「「「……」」」

……顔を見ると、三人が私の顔を期待を込めた表情でじっと見ています。……どうやら3人は考えが一緒のようです。

だから神父様達は私が来るのを朝早くからここで待っていたので

しょう。

先に二人の聖兵がいたのは神父様が自分の答えが正しいか二人を呼んで話を聞いていた、と言う所でしょうか。

「……ふぅ」

私はそんなことを考えながら、神父様と二人の聖兵に向かって、三人が期待している答えを口にしました。

――装備を整えた私が町に助っ人に向かったのはその日の午後でした。

町

「腰が痛いですねぇ……」

幸い、旅の途中は一度も死獣に会うことがなく無事に町に着くことが出来ました。

ですが、馬に乗るのは久しぶりだったので少し腰が痛みます。

今年で２４ですが、今は老人のように腰をさすりながら町の中を歩いています。

確認のため、町の人々の様子を観察しましたが、特に町の人達に緊迫感などはありません。

これは町のあちこちにある教会特製の「聖字」がちゃんと機能している証拠でしょう。

「聖字」とは教会が開発した技術であり、これを壁や地面に書き込むなり刻み込む事で死獣が町の内部に入ってこれないようになるのです。

そして、これがあるお陰で私達聖兵は町に死獣が侵入する心配をすることなく、周辺の死獣を退治することができるのです。

……昔はこの技術がまだなく、大量の犠牲者で出たそうですが、今はこれがあるお陰で町に死獣の被害が出る事が減りました。

この街も聖字の加護で町に被害はないようですが、助っ人を頼む

ほどだったのですからきっと町の周辺に強力な死獣が出現しているのでしょう。

強力な死獣の出現は町の住人にとって死活問題であり、町の交易にも関係してくるので早めの退治が必要です。

でないと、もし町に病気が流行ったときなど外に応援を呼ぶことも出来ず、森から薬草を採集するもできなくなり、とても困った事になります。

そうなる前に私達聖兵が死獣を退治し、町の皆さんの安全を守るのです。

――ですが、その為には情報が必要となる為、まずは助っ人を頼んできたこの町の教会に向かいます。

教会を探す間、町の皆さんが私のことをよくチラチラと見てくるのですが、仕方がありません。

私は今、大変大きな背嚢を背負っているのです。

背嚢の中には手甲や足甲、それに胸鎧に盾などの防具と死獣退治に必要な道具各種が入っています。

この町ではどんな物が売っているか不明な為、以前いた町でなるべく大量に買い込んで来たのです。

あとは腰に差している武器にも原因があるでしょう。私は腰に剣を一本ぶら下げています。

普通ならば町の治安の為に町の住人でない旅人などは刃物を町の門番に預けるようになっているのですが、仕事の関係上、私は特別に許可を得て街中を歩いているのです。

それの所為で町の方々から大変注目されています。

あっ、あと、注目されている原因に私の容姿が関係しているかもしれません。でも、私は特に美形だとか悪魔のような顔をしているわけはありません。大変申し訳ないことですが。

私は体の色素が薄い人間でして、特に髪とか肌の色が薄いのです。病人のような青白い肌と、老人のような灰色の髪をした男。それが私です。

この所為で病人によく間違われることがあります。

実際、左目が少し日の光に弱いですが髪を伸ばして光から防護しているので大丈夫です。ただ、それでも目が充血しすやすいので普段は髪の内側で目を閉じてます。

そんな人間が剣を腰からぶら下げて重そうな荷物を背中に背負っているのですから、目立たないという方が少しおかしいのかもしれません。

でも、この病人みたいな容姿のおかげで得をすることもあります。

私が教会までの道を聞くと、大抵の人が「この人は何か深いわけがあって行くのだろう」と勘違いして優しい言葉と一緒に道を親切に教えてくれるのです。

その証拠に、私はこの町でもすんなりと町の教会につく事が出来ました。

「……ふぅ、やっと着きましたか」

教会の前に着くと、私は一度の前で呼吸を整え、ゆっくりと教会の扉を開けました。

教会

「おや？」

「……」

教会の扉を開くと目の前には礼拝堂が広がり、そこに、大変な美人さんが立っていました。

それも可愛いというより美しいと表現する方の、とびきりの美人さんです。

すらっと伸びた足に、ぐっとくびれた腰、そして女性らしさ溢れる豊かな胸。

表情には少し険がありますが、一度微笑めばきっと男は殆どが虜になってしまうでしょう。

切れ長の瞳とスッと通った目鼻立ち、そして真っ直ぐに伸びた綺麗な黒髪。

顔立ちにもどこか品があります。

きっとこの美人さんはどこかの貴族のご令嬢なのだと思いますが、……それにしては格好が少しおかしいです。

ドレスではなく、男が着るようなズボンと黒の上着を着ているのです。

なんだか私が着ている聖兵の戦闘服によく似ています。……というか、多分同じものです。

動く易さ前提に作られた特注の服なので高級品には違いないのですが、貴族の方々が着るような高級品とは種類が違うはずです。

知らずに着ているのだとしたら忠告した方がいいかも知れませんが、そうするとご令嬢の機嫌を損ねてしまう可能性があります。

そうなっては大変面倒なことになるので、私は何も言わないことにします。

「おっと」

じっと見ていては相手の方に悪いので、視線を相手の方から外します。

そのまま荷物と一緒に礼拝堂の長い椅子に座り、教会の高い天井をぼんやり見上げ始めます。……この行為に意味なんてないですが、美人さんがどこかに消えてくるまで続けるつもりです。

――ですが、美人さんはどこにも消えてくれませんでした。

『ギシィッ』

……それどころか、私が座っている椅子の前の席に座ってしまい

ました。

「……。」

「……。」

しかも、行儀が悪い事にこちらを向いて座っているのです。椅子の背もたれに肘をついてこちらをじっと見ているのです。

私は教会の天井を見上げ、美人さんは私のことを振り向きながら見ています。

「……。」

「……。」

……これは、居心地が悪い。

今すぐ荷物を背負いなおし、走って教会の外に逃げ出したい気分です。

ですが、それをするとここまで来た意味がないので、この現状をなんとかすることにします。

「……私に何か御用でしょうか？」

「お前は、もしかして聖兵か？」

私が思い切って声をかけると、美人さんが逆にそう訊ねてきました。

「えぇ、私は聖兵です。ですが、それがどうかしましたか？」

少し戸惑いましたが、私は美人さんの言葉に答えました。もしかすると、彼女が私のことを見ていたのはコレを訊ねたかったからだと思ったからです。

ですが、私の仕事など聞いても貴族の方には大した意味なんてないはずです。……これは一体どういうことなんでしょうか？

「……まさか、お前のような奴が来るとは」

そんな事を考えていると、目の前の美人さんがこちらを振り向いたままの体勢で、顔を、「手」で覆いました。

その仕草からは落胆の感情がありありと見え、思わず慰めの言葉をかけたくなってしまいました。

ですが、私は一度思いとどまりました。

「……あっ、『なるほど』」

それは美人さんの手を見たからです。

彼女の手は古傷だらけの手でした。

――それも何かの爪や牙につけられた傷跡です。

その手を見て、だいたいの事を理解しました。

美人さんが落胆しているのは、病人のような見た目の私を見て戦力外だと思ったからに違いありません。

助っ人を頼んだのに、こんな見た目の奴が来たら誰だって落胆するでしょう。

美人さんが落胆しているのは、彼女がこの町に所属する聖兵だからです。

あんな手をした人間は聖兵ぐらいなものですから。

「失礼ですが、同業者の方ですよね？」

「……あぁ、この町に所属しているヒルダという者だ」

訊ねてみると案の定、彼女は聖兵でヒルダという名前らしいです。

「私は別の町に所属しているグレイといいます。今回は助っ人としてこうしてきました。」

「……あぁ、よろしく頼む」

「よろしくお願いします」

そのまま椅子に座りながら簡単な挨拶をします。

仕事の詳しい話もついでに聞きたかったのですが、美人さんのこの様子からはまともな話を聞き出せないと思い、代わりに彼女から神父様の居場所を教えてもらう事にしました。

「神父様はどちらにいらっしゃいますか？」

「……この時間は教会の中庭で孤児の子供達に勉強を教えてるはずだ。多分そこにいる」

「ありがとうございます」

お礼を言い荷物を背負い直して中庭に向かいます。

教会のつくりは大体どこも似ているので、中庭はすぐに見つかりました。

そして、中庭にたくさんの子供に囲まれながら話をする白い髭の老人を見つけました。

おそらくアレがこの教会の神父様でしょう。

服も足元に届きそうな黒いスータンを着ているので間違いありません。

「この花はとても綺麗なのですが、根に毒があるので決して食べてはいけません。お腹を壊すだけではすみませんよ。下手をすれば死んでしまうことだってあるのです。その証拠に、この花を植えてモグラを追い払うといった……」

なにやら手に持った花を指差しながら子供達に向かって青空教室を開いているようです。子供たちはそれを花壇のレンガに腰を下ろして聞いていたり、そのまま地面に座って聞いていたり、または立ったまま聞いていたり様々。

見ている側としては服が汚れてしかたがないと思うのですが、それともやんちゃな子供が服を汚すのは仕方がないと諦めているのでしょうか？

私が子供の頃は服を汚すと酷く怒られた記憶があるのですが……

まぁ、そんなことはどうだっていいですね。とにかく今は神父様に話かけましょう。

私はそう思って授業をしている神父様の方に歩いていき、声をかけました。

「すみません、神父様」

「ん？　あなたは一体？」

「私はこの町に先ほどやって来ました聖兵のグレイと言います。この度は助っ人としてやってきました」

「おおっ！　来てくださいましたかっ！　よかったよかった！」

「いえ、これも仕事ですので。それよりもできれば今回の話を詳しく聞きたいのですが……、お時間よろしいでしょう？」

「えぇ、大丈夫ですとも！　おっと、みなさん今日はこれでおしまいにするので遊びにでかけていいですよ。でも、町の外にだけは絶対駄目ですからね」

前半は私に向けて、後半は周りの子供達に向けていった言葉で、神父様の言葉聞いた子供たちはまるで飛ぶように外へと出かけていきました。

「では、グレイさん。仕事の話をしましょうか」

「はい」

神父様は子供たちが中庭から飛び出していくのを見てから、私にゆっくりと今回の事を話し始めました。

町の聖兵達

「相手はこの町近くの森に現れた中型の死獣1匹と、それを取り巻く小型の死獣が5匹です」

「数は大したことはないですが、中型がいるですか」

「……はい。この町に聖兵は4人ほどいるのですが、彼らだけではどうやら……」

「なるほど」

私は神父様の話を聞いて納得しました。

死獣は小型の場合はそれほど脅威ではありませんが、体長が4メートルを超える中型になるとかなり話が変わってくるのです。

小型の死獣は敵を襲うときは野生の獣と同じように牙や爪だけで攻撃してきますが、中型はそれだけではありません。

中型の死獣達は「瘴気」と呼ばれる、黒い「もや」のようなものを武器にして襲い掛かってくるのです。

瘴気を口から吐き出し相手の武器や体を溶かす者、瘴気を槍の様な形状に変え突進してくる者。

この他にも瘴気を液体や固体へと形を変えて襲ってくるのが中型の死獣なのです。

そして攻撃力や防御力は小型の死獣の比ではなく、固体によって強さの差に開きもあってとても厄介なのです。

実際、今回現れた中型の死獣もだいぶ厄介な奴のようです。

「では、早速この町の聖兵のみなさんと作戦を練りたいので、みなさんを集めてもらえませんか？　自己紹介のほうもしておきたいので」

「わかりました。すぐに皆さんを呼びましょう。確か礼拝堂の方にヒルダさんがいたので、すぐに集められるはずです」

「あぁ、その方なら私も見ました。やはり同じ聖兵の方でしたか」

「えぇ、お若いのに実に腕の立つ方で」

「それは頼もしい」

「では、彼女に皆さんを集めてもらえるように頼むので、しばらく教会の中で待っていてくれますか？」

「わかりました」

「それでは、また」

そう言って神父様が礼拝堂の方に向かったのを見て、皆さんが集まるまでの時間を潰そうと中庭の花壇を見させてもらいました。

「ほぅ」

花壇をみると、教会という場所の所為か観賞用の派手な花は少なく、むしろ実用的な薬草やハーブなどが多く植えられていました。

仕事柄、薬草関係には詳しいので思わず観察してしまいました。

「ん？」

ずっと花壇を観察をしていると、花壇の傍に小さな鉢植えがいくつも置かれているのが見え、何が植えられているか気になって鉢植えを見てみると、鉢植えから小さなコスモスの花が咲いていました。

さらによく見れば、コスモスの鉢にはそれぞれ人の名前らしき物が書かれており、おそらくこの教会にいる孤児たちが植えたものでしょう。

「教会らしい、良い花ですね」

コスモスの花言葉を思い出し、この花を選んだのはさきほどの神父様だと確信しました。

きっと、この花を育てながら『愛情』や『真心』も育てて欲しいと願って選んだに違いありません。

「……これは、仕事にやる気が出てきますね」

こんな気持ちのいいことをする神父様とこの花を育てる子供達の事を思い、私は体に力が漲るのを感じました。

――どうやら、今回の仕事は大変やりがいのあるものになりそう

です。

その後、神父様がもう一度やって来て礼拝堂の方に呼ばれました。

私はそこでこの町の聖兵の方々すべてに会いました。

一人は先ほどこの礼拝堂で見たヒルダという名前の女性。他にも眼鏡をかけた女性が一人に、若い男性が二人。

死獣は聖字の力が機能する限り町の中には入ってこれないので聖兵が武装する必要などないのですが、目の前にいる四人はそれぞれ皮や鉄の鎧を身につけ武器も持った完全な武装状態です。

私はここまで案内してくれた神父様にお礼をいって部屋を出て行ってもらってから、これはどういうわけか皆さんに理由を冗談まじりに聞きました。

「なにやら皆さん大変物騒な格好をしていますが、まさかこれから例の中型死獣の討伐に向かうわけではないですよね？

」

「まさか、いきなりそんな無謀な事はしないさ」

私の言葉に礼拝堂の中にいた一人の若い男性聖兵が答えました。

「俺たちがこんな格好をしているのは、アンタの実力を知りたかったからだよ」

「？」

「……ようするに、お前がどれだけの強いか確かめておきたいんだ。今後の作戦にも関係する大事なことだから、失礼な事だとは思うが……」

私が頭に疑問符を浮かべていると、ヒルダさんが私のほうに近寄ってきて補足の説明をしてくれました。

「あぁ、そういうことですか。いや、別に構いませんよ。腕相撲でも模擬戦でも何でもやりましょう」

ヒルダさんの言葉を聞き、何故彼らが武装をしているのか納得した私はそう答えました。

「「「……。」」」

ですが、言い方が生意気だった所為でしょうか。ヒルダさんを含めた皆さんをとても不機嫌にさせてしまいました。

「……どうやら、自分の腕にかなりの自信があるようだな」

近くにいたヒルダさんが目を細めて私に話しかけてきます。

どうやら、彼女を一番不機嫌にさせてしまったようです。

彼女は私がこの町に来たことをよく思っていなかったようですし、先ほどの一言もきっと癇に障ったのでしょう。

「かなり、というほどではありません。そこそこ、といったところですよ」

そして、私は女性を怒らせることに関して意外と才能があるらしく、彼女を本格的に怒らせてしまいます。

「……十分だ。その、『そこそこ』の腕を私達に見せてみろ」

おかげで、私はこのあと彼女と殆ど実践と変わらない模擬戦をすることになりました。

処刑人の剣

私とヒルダさん、それにこの町にいる他の聖兵三人。合計5人で教会のすぐそばにある空き地に向かいました。

「では、装備を着けろ。そしてさっさと始めるぞ」

「と、いっても一体どうするんですか？　ルールとかは？」

空き地に着いた早々にいきなりこう言ってきたので、私は慌てて「町中の喧嘩ではないのだから」と暗に言いました。

すると、ヒルダさんは少し考えるそぶりをした後――

「では、ルールはタイマン勝負。決着はどちらかが『参った』を言うまで、もしくは他の奴らが止めに入るまでだ」

という大変アグレッシブなルールを設けました。正直私としては「それ、町中の喧嘩と大差ないです」と言いたい所ではあったのですが……なんだか言ってもルールの改正はされない気がしたので止めました。

仕方なく、私はここまで背負ってきた背嚢の紐を解き、空き地のすみで自分の防具を取り出します。

まず、脛当てまで付いた足甲と肘までである手甲。

次に胸部を守る胸鎧。

そして、最後に取り出したのが片腕に嵌めながら持つカイトシールドと呼ばれる凧の形をした盾。本来これは馬上で使うものですが、私のは地上で使えるように改良された少し小型の物で大変使いやすい。

以上の物を順に身に着け、最後に左腰に差している剣を手に持てば準備が完了します。

「ふむ……」

一応、軽く素振りでもしようかと鞘から自分の剣を抜きました。

私達聖兵の武器は死獣に対して効果的な聖銀（ミスリル）で作られており、私の剣もこの素材で作られています。

見た目は普通の鋼や鉄で出来た武器と一緒なので、珍しいというわけではないのですが……何故か私の剣を見たヒルダさんや他の三人が驚いた顔をしています。

「ん？」

死獣の血糊でも付いてたのかと思い、剣の表面を見るが何もありません。

「おい、おい……。アンタ……それ何だよ……」

これは気のせいだと思い、素振りをしようと構えましたが、それを見ていた男性の聖兵が声をかけてきました。

「はい？」

「いや、その武器だよ。武器」

「あぁ、コレですか？　面白い形をしているでしょう？　」

私は彼らが何に驚いているのかがわかり、笑いながら指で自分の剣を指差します。

私の剣はオーダーメイドで作られた専用の剣で、かなり珍しい形なのです。

正式にはエグゼキューショナーズソードというものですが――私は長い呼び名は苦手なのでこう呼んでいます。

『処刑刀』

罪人の首を切り落とす為だけの切っ先の「無い」剣。

それが私が持つ武器の名です。

私にとってこれが一番使い易い武器なのですが、どうも処刑道具を武器として使う人間は気味悪く見える様です。

「「「「「……」」」」」

その証拠に、ヒルダさんや他の三人が私の事を異常者を見るような目で見ています。

こんな目で見られるのは慣れていますが、当然気分はよくありません、

なので、さっさと模擬戦闘を始めようと思います。

「用意が出来ました。――さぁ、始めましょう」

処刑人の剣（後書き）

ロマン武器っていいですよね。憧れます。

模擬戦

私の用意が整ったを確認すると、ヒルダさんは一定の距離をとってから武器を構えました。

「では、行くぞ」

「いつでもどうぞ」

私はヒルダさんの声に答え、左手に盾を右手に剣を構えました。

対するヒルダさんは両手にハルバードと呼ばれる長柄の武器を構えています。

ハルバードとは重量のある武器でありながら、斬る、突く、叩く、引っ掻くなど多様な使い方が出来る優秀な武器です。

しかし、それゆえに完全に扱える人間は少なく、それを獲物として使っている女性はとても珍しくこれには内心驚きました。

特にハルバードなどの長柄武器は絵画などで戦女神の持つ武器として描かれる事が多いので余計に驚きました。（ここまでこの武器が似合う人は中々いないという意味です）

まぁ、そんな私の内心の驚きはさておき、模擬戦は始まりました。

私は左手に盾を持ち、右手に剣を。

ヒルダさんは盾は持たない、ハルバードの両手持ち。

まず、私達二人はお互いの持った武器で牽制しながら距離を取ろうとしました。

「はぁっ！」

『ビュンッ！！』

しかし、有利なのは勿論ヒルダさんのほうで、間合いの長いハルバードで猛烈な突きを繰り出してきます。

「っ……、……くっ！　……はっ！」

私はそれを盾で防ぎますが、下手な防ぎ方をすれば腕ごとへし折れてしまいそうな強烈な突きです。とても女性の腕から繰り出される攻撃とは思えません。

私は攻撃を正面から「受けて」防ぐのではなく、攻撃を「流す」防御に切り替えます。

盾の向きと足捌きを駆使し、突きの衝撃から盾と自分を守り――反撃する機会を待ちます。

「！？」

すると、突きを繰り出していたヒルダさんの動きが変わります。

今までの突き主体の攻撃から、ハルバード本来の重量を利用した重い斬撃へ。

兜や鎧すら砕くハルバードの攻撃をまともに受けてしまえば骨など簡単に折れます。

もちろん、ヒルダさんもその辺りの事はわかっているはずなので、きっと手加減はしていると思うのですが……。

『ガンッ！！』

「っ……！」

盾から伝わる衝撃からはそんな気遣いは全く感じられず、私は後方に吹き飛ばされてしまいます。

衝撃から逃げるため、後ろに飛んだので痛みは無いのですが、これには少し理不尽さを感じます。

一応こちらは模擬戦なので手加減をしているのに、あちらにその気配がない。

手加減が難しいのはわかりますが、柄の部分で殴るとかもっと工夫が出来るなのに相手にその気配が全くない。思いっきりハルバードの刃で攻撃してきたのには、さすがの私も。

「……ちょっとカチンときますね」

一言何か言ってやりたい気分でしたが、この戦闘中には無理そうです。

なので、言葉ではなく行動で何か言ってやろうと思います。

――私は飛ばされ距離が出来たのを利用し、左目にかかる髪を後ろにまわして左目を開けます。

左目を開けたことにより視界が倍になり、これにより遠近感が多少よくなりました。

別に相手を侮っていたわけではなく、単に左目が光に弱いから閉じていただけなのですが、ヒルダさんはそのことを知りませんからきっと怒るはずです。

「……。」

案の定、ヒルダさんの綺麗の顔には怒りの表情が浮かんできました。今は戦闘中で喋るなんてことはしませんが、きっとそれ以外だったら怒鳴っている所でしょうう。

もちろん、私がしたかったのはこんな子供の仕返しのような事ではありません。

――ここからが私の本当にしたかった事です。

「つぁっ！！」

「ふっ！」

ヒルダさんの攻撃が再び始まり、今までよりもさらに重みが増し盾に伝わる衝撃も増してきました。

おかげで実に見やすくなってきました。

武器の攻撃力を上げるには力をそちらの方向にだけ注げるよう、体を使った重心移動をしっかりする必要があります。

さらに力を入れれば入れるほどに、この重心移動は目で見てわかりやすくなります。

私はヒルダさんの攻撃をしのぎながら、彼女体の力の入っている方向とその速さを自分の体に覚え込ませます。

そして、その方向や速さを一度覚え込むと、私はある事をし始めます。

「せぇっ！」

「しっ！」

それは「削り」です。

相手の力の方向と速ささえわかってしまえば、防ぐ事が容易になり反撃もしやすくなります。

それを利用し、私は体の腕や足など体の中心から外れた部分に攻撃を加えてゆきます。

攻撃をいなして、盾のふちや剣の腹などで攻撃する。

相手が攻撃をしてくるたびに単調なこの作業を淡々と続け、相手の動きが徐々に鈍るのを待ちます。

自分から攻める事は一切せず、相手の攻撃を読みながらする反撃。

ゆっくりとですが確実に相手の体を傷つけるこの攻撃の方法を私は「削り」と呼び、こうやって相手が弱るのを待ちます。

しばらくこの攻撃を続ければ相手は警戒して手を緩めるものですが、ヒルダさんは中々手を緩めません。

「ふっ！　はっ！」

むしろその対応策として、隙の小さな突きを多用し、こちらが反撃しにくい攻撃をしてきます。

ですが、これこそ私が狙っていたものです。

相手の攻撃を読み、その体を削って弱らせながら相手の力や速さを低下させ、そこから焦りを生ませます。

特に、重量のある武器を使う人間は戦闘を長引かせることに慣れていません。

長引けば長引くほど、その体から焦りが生まれます。

「っ……！　はっ……！」

私はその焦りを徐々に煽って攻撃を単調な物へと誘導していきます。

「せぇやぁっ！！」

そして、焦って大振りな攻撃が来ると判断した時。

私は一歩、踏み出します。

向かう先は、死線と呼ばれる危険な攻撃域。

通常では避けるべきその場所へ、こちらから向かいます。

ヒルダさんが繰り出そうとしているのは、今までの初動の動きから見て間違いなく突き。

私はその突きに向かって一歩踏み出し、反撃を開始します。

『ボッ！！』

『ガンッ！！』

胴体を貫きそうな鋭い突きを、私は手に持った盾で横方向に弾きます。

「！？」

焦りいささか力の入りすぎたその突きは勢いが強く、別の方向から来た強い衝撃に使用者の腕がしびれ一時的に動きが止まります。

その隙を狙い、私はハルバードを持つヒルダさんの腕を狙います。

盾でハルバードを弾いたので手を狙うには剣しかないのですが、それだと大怪我を負わせてしまうので、足甲をつけた右足でヒルダ

さんのしびれた腕を蹴り上げます。

「ふっ！」

「痛っ……！」

狙ったのは肘の部分。

しびれた腕にさらに強烈な蹴りを受けたヒルダさんはハルバードを持つ手が緩みます。

その際、ハルバードが地面に落ちかけますが――

『ガッ！！』

私はその隙を逃さず地面に落ちかけたハルバードの柄を踏みつけました。

ヒルダさんの手はまだハルバードをしっかりと握っていますが、この状況からの攻守逆転はもう難しいでしょう。

「……。」

「……。」

ヒルダさんと私はしばらくその状況の中でにらみ合っていましたが、ほぼ同時にお互いの武器を手放しました。

私は自分の剣を地面に突き刺し、ヒルダさんはハルバードから手を放します。

「私の勝ちですね」

「……参った。私の負けだ」

そして、それぞれ模擬戦の勝敗を認め合います。

それを確認するとお互いの武器を地面から抜いて自分の鞘や背中に収めました。

「では、これからよろしくお願いします」

「あぁ、こちらこそ頼む」

――この後、模擬戦を終えた私はヒルダさんと他の聖兵のみなさんに酒場に連れていかれ、そこで過去の仕事の内容を色々と話すことになりました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7991y/

会いに向かう……（仮題名）

2011年11月23日19時58分発行